

ある日の育児日記から

(62)

佐藤 和代



朝食を食べながら、夢の話が出ることがあります。「有ね、きのうの夢、おもしろかった」「そう、どんなの？」「お母さん、知ってるでしょ」「えー、有の夢だから、知らないよ」「知ってるよ、お母さんもいたもん」こういう話、大人は何か頭がぐらぐらしそう。でも圭と有なら会話が成り立ったりします。「圭、きのう海の夢みた。泳いでたら魚がいて、有もはいってきて」「あっそうだよ、有もさぶーんって、泳いだんだよね」「そうそう、おもしろかったねー」

まったく何のこっちゃ、と思いつつ、こういう

のは楽しい。
でもいつも平和な会話とは限りません。テレビを見ていた有が「あ、ここの行ったね」圭は「うそー、外国よ」「だって行ったもん」「どうやって？」「ひこうき」「うそつ」：有にとっては夢も現実も空想もそんなに違いはないけれど、常識を身につけ始めた圭には、ときとしてそれが許せないらしい。別にうそじゃないの、と説明してみるけれど、納得させるのは難しく、困ったものです。

困ったといえは、この頃有が唐突に発する質問も困る。「ねえ、これ、夢？」
：うーん、有くん、それはね、お母さんにだつてよくわからないことなのよ。

